

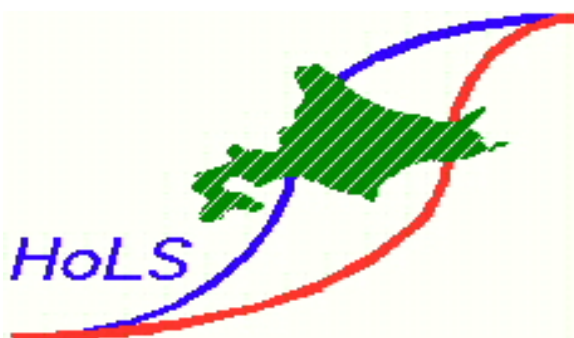
地すべり北海道 28

～北海道地すべり学会ニュース～

目 次

[巻頭言]	
就任のごあいさつ／田近 淳	1
[Hols News]	
平成 22 年度地すべり学会研究発表会参加報告／石田 博英	2
2009 年色丹島再訪記（第 2 回）／田近 淳	3
[現地検討会報告]	
平成 22 年度現地検討会開催の報告／巡検部	7
現地検討会に参加して／鳥谷部 勇弥	9
[総会報告]	
平成 22 年度総会、特別講演会、研究発表会／事業部	10
[委員会活動報告]	
技術委員会より —平成 21 年度の活動報告と今後の活動計画—	11
企画委員会より	13
研究委員会の H21 年度活動報告と今後の活動計画	14
[事務局より]	
学会の動向と記録	15
[お知らせ]	16
[賛助会員名簿]	
[学会役員幹事運営委員名簿]	
[編集後記]	

2010 年 10 月



[巻頭言]

就任のごあいさつ

(社)日本地すべり学会北海道支部長

北海道地すべり学会会長

田近 淳

この4月の支部総会で、前田支部長の後任として(社)日本地すべり学会北海道支部(以下、道支部)新支部長に選任されました。よろしくお願ひ申し上げます。岡村元支部長の時代も含めますと副支部長を10年も務めました。また北海道地すべり学会(以下、道学会)の会長にも再任されましたので、あまり新鮮味はないと思いますが、伝統ある地すべり学会北海道支部を受け継ぎ、ささやかでも発展させ、次代に引き継ぐ役割を会員の皆様と共に果たしたいと存じます。重ねてよろしくご協力をお願いいたします。

当面の課題

支部には当面、いくつかの課題があります。当然のことですが、道学会と道支部の運営は交錯しやや複雑・煩雑になっています。この簡素化を進めることが第一の課題です。また、前支部長からの引継ぎ事項でもありますが、北海道開発局や北海道との災害時緊急調査の連携協定締結の問題があります。これについては(社)土木学会、(社)地盤工学会の各北海道支部とともに開発局との連携協定を結ぶべく準備が終わりつつあり、まもなく締結の運びです。さらに学会の活性化に向けて企画委員会や技術委員会・研究委員会そして各部の活動もますます強化されなくてはなりません。ただし急には何事もできません。少しずつ進めてゆきたいと思ひます。

地すべり学の今・明日

最近、地すべり現場にゆくと「この地すべりは放って置いてよいか」という質問にしばしば出会います。地すべりがあると、どこでもハードで止めてしまうのが普通だった一昔前とは隔世の感があります。思い起こせば、地すべり学会北海道支部が活発な支部活動を展開した1990年代のとくに後半は北海道の経済がピークに達した時期でもありました。その後、公共事業の見直しの中で、地すべり対策事業や防災事業に対する目も厳しくなっています。しかし、こういった中でも、人々の安全安心のために地すべりを防ぐ技術を向上させるという目的は維持されなくてはなりません。目前の災害を座視する

ことはできないのです。

しかし一方で、すべての地すべりをハードで止めてしまわなければいけないということはありません。「少しずつしか動かないし、保全物もないから、放っておく」というのも選択肢としてありえます。さらに最近では防災工事が流域の生態系や生物多様性を破壊しているといった議論もあります。そのような場合の様々な選択には、私たち地すべり学会会員の地すべりに対する知恵・知識・技術が必要なのです。岡村元支部長は早い時期から「複雑で多様なすべり地形が多様な生態系の形成に寄与している」と指摘していました。また、釧路海岸や本州の山間海岸の棚田の例をみても「地すべりが急傾斜の山間や海岸に水の得られる人の住みうる土地をつくってきた」という意味で人間にとって紛れもないプラスとしてはたらいてきたことも事実です。

こうしてみると、現在の社会情勢は「地すべり」を再認識し多面的に総合的に捉え調査研究する契機ともいえるかもしれません。むしろ積極的に「地すべり学」の守備範囲をさらに拡大するチャンスといえます。

2012年研究発表会は北海道で

このような地すべり学の明日への発展と、支部活動の活性化の契機とするため(社)日本地すべり学会の2012年研究発表会は北海道支部で引き受けることに致しました。同年は北海道・東北・新潟各支部からなる北日本ブロックの開催年です。前回1999年以来ですので13年ぶりとなります。前は千名を超えるまさに大会で多くの収穫がありましたが、今回も、身の丈にあった学会として、再び実のある発表会にしたいと思ひます。最後に会員の皆様、各関係機関の皆様の協力とご支援をお願いして、ご挨拶いたします。

平成 22 年度地すべり学会研究発表会 参加報告

防災地質工業株式会社 石田 博英

平成 22 年度地すべり学会は沖縄県那覇市にて開催されました。私は昨年から地すべり学会に参加しておりますが、今回は聴講だけでなく発表も行いましたので、その感想についても報告します。

まず研究発表会に参加した率直な意見として、自分の知識と基礎学力の低さに気づかされた研究発表会となりました。特にすべり面強度などの土質力学に関する知識が浅く、発表内容の理解に苦しむ場面が多々ありました。

どの学問でも同じだと思いますが、目的は一つであってもそこに至るまでの多岐にわたる分野が基礎として存在し、その基礎知識が一つでもあやふやな場合、表面上は分かったような気がしていても、いざ専門的に取り扱うときにはほとんどついていけないということを痛感しました。

今後は自分が「何を知らないのか」「どんな知識が必要なのか」に気づいたときには意欲的に学習に取り組み、研究発表会の最中に発表者に共感したり、疑問を持ったりし、より有意義に楽しく研究発表会に参加したいと考えております。

発表については昨年度の業務で担当した地すべり災害についての事例報告をさせていただきました。平成 22 年度の北海道支部研究発表会で発表させていただいた内容とほぼ同じものでしたが、伝えたい事例があまりに多く、結果として全てが中途半端な発表となってしまったと感じております。

しかし、今回の発表はある意味自分に発破を掛け、今後も意欲的に研究発表会に参加するためには良い経験になったと考えており、今後各事例について詳細な調査をした後に、再度一つ一つ発表をさせていただきたいと考えております。

最後にオプション巡検の「わくわくジオツアー」に参加した感想を述べさせていただきます。

これまで兵庫県より西を訪ねたことの無かった私にとって、珊瑚礁やビーチロック、熱帯カルストなど見るもの触れるもの全てが初めてのものでした。

特に強く感じたものが時間の流れでした。沖縄の気候による岩盤の風化速度の速さや樹木の成長の速さは北海道とは全く異なるものでした。

地形・地質や植物などの時間の流れと、沖縄の方々のゆったりとした生活とのギャップも非常に面白かったです。

す。

今回の研究発表会では自己啓発や様々な初体験ができ、非常に有意義なものとなりました。これからも研究発表会や様々な行事に参加させていただき、多くの経験を積んで行きたいと考えております。



海浜堆積物が炭酸カルシウムで膠結されてできた「ビーチロック」。

写真は珊瑚の死骸を包有するビーチロック。固結する速度が速く、空き瓶や陶器の欠片が取り込まれることもある。(残念ながら今回は確認できなかった)



世界最北端の熱帯カルスト「大石林山」。

園内には多数のピナクルが林立し、“石林山”の様相を呈する。写真は「悟空岩」隙間からはソテツが生える。

2009 年色丹島再訪記（第 2 回）

北海道立総合研究機構地質研究所 田近 淳

いよいよ上陸

9月12日、一夜明けて甲板に出ると、空気は澄み切り、穴澗湾は箱庭のように美しい。

今回の「北方四島地震専門家交流訪問団」は、北海道大学地震火山研究観測センターの西村裕一先生を団長として、同じく中村研究員との津波グループ、同センターの笠原先生と高田・山口両技官の観測所グループ、そして筆者一人の地震地すべりグループからなるもので、これに文部科学省の宍倉さん（産総研活断層センターから出向した地震地質の専門家）、外務省ロシア課の門倉さんの総勢8名で、前回訪問団から倍増であった。年齢のせいだろう、私は副団長だということを出発直前に名簿を見て知った。さらに出発の直前に、笠原先生から、地すべりに同行調査するはずだった人がウラジオの学会に行ってしまったことを聞いて、がっかり。ということで、私は余力が入らなかったが、今回の訪問の目標としては、前回十分見る事のできなかった斜古丹東方の1994年地震による「馬の背」（佐々先生がこの場所を馬の背と呼んでいる）の地すべり周辺の地質の観察と、同地震によるもう一つの地点である斜古丹西方蔭ノ澗の状況を見ることにした。翌日は天気が悪化することが予想されたため、上陸したらすぐにそれぞれ現地調査にゆくことをロシア側に提案することにして、上陸の準備をした。

日本からの船は直接埠頭に接岸できない。根室から引っ張ってきたはしけ（ロサ-ルゴサII）に乗って、穴澗（クラボナゾボツコエ：蟹工場のあるところ）の水産会社の船着場へ向かう。1994年東方沖地震で岩盤すべりの発生した海岸の斜面が朝日をあびて良く見える。現地はロシアの極東時間なので時差は+2時間。もう10時だ。埠頭には、なつかしい顔が見える。ロシア科学アカデミー極東支部色丹水文物理観測所のシーシュキンさん、このプロジェクトのロシア側の大将であるカイストレンコさんなど。名前を呼ばれながら上陸。首脳部で話がついて、津波グループと宍倉さんらは津波堆積物の調査のため太平洋側へ。観測所グループと私は、用意されたランドクルーザで、ひとまず斜古丹（マロクリリスコエ：小さなクリルのまち）の色丹水文物理観測所に向かった（写真1）。

穴澗から斜古丹への道は色丹の幹線道路である。前回はランドクルーザで飛び跳ねるような道だった。その後の新聞報道では、この幹線道路は整備して舗装する（!）ということだったので、どうなったのか期待していた。拡幅と路盤整備の工事や橋の改築は進んでいたが、舗装まではまだ数年かかりそうだった。車中、運転手のおじ

さんが、ここは日本の病院があったところ、などと観光案内してくれる。交流ビジネスだ。新しい建物がめだち、斜古丹の山の手では幼稚園が工事中だった。色丹はベビーブームだそう。道内でも有名な高齢化地域のわが江別市大麻とは対照的だ。

色丹水文物理観測所の建物は2年前そのままだったが、美しい看板が掲げられていた（写真2）。



写真-1 斜古丹の風景



写真-2 真新しい観測所の看板

うらかな休日

私たちはさっそく、歩いて馬の背の地すべりに出かけることになった。馬の背は歩いて30分程である。日本側は私のほか観測所グループも同行することになった（写真3）。ロシア側は予定の女史が来られなくなったということで、シーシキン（サーシャ）のほかメレニコフさんという構造地質学の先生がわざわざサハリンから来て対応してくれた。最大級の厚意の表れだと思う。

歩き始めた。季節のせい、2年前の訪問ではまったく気づかなかったが、あちこちに牛がいる。牧場と、家の庭と、道と区別無しにあちこちにて草を食べている。あとでのことだが、クリル人の墓地に行こうと思ったら牛に妨害された。日本語が通じない。いい天気だ。斜古丹山が美しい(写真4)歩いていると道の傍らで、おじさんとおばさんが下着だけで日光浴をしていた。突然現れたのでビックリした。午後も同じ道を往復したが、お昼頃今度はバーベキューを楽しむ家族(?)がいた。この人たちは、われわれが帰る頃にはジャンジャン、音楽を掛けて、同じような格好で踊っていた。ウオッカカピールの効果だろう。きょうは土曜日であることに気づいた。

地すべり地に着いて私たちが歩き回っているときにも、島のおじさんや青少年の幾人かが、そのあたりに散歩にやってきた。地すべりの亀裂の周りも踏み分け道が続いているので、暖かい時期にはここは良い散歩のコースなのかもしれない。帰りにも、森の藪の中から、小鳥のさえずりのような話し声が聞こえた。うららかな休日である。



写真-3 馬の背へ出発



写真-4 斜古丹山

馬の背から斜古丹山へ - 世界の果ての岬を眺める

地すべりの縦断をつくるために、末端から頭部までできる限りまっすぐ歩いた。前回はこの直前でハンディGPSの電池が切れてしまった。今回は機種もレベルアップして、バッテリーも長持ちする。観測所グループと離れて行動。すべり面が見えるはずの先端～側面は高さ100mの海食崖で、近づくのは無理だろうと考え、Googleで確かめていた北側のもう一つの古い地すべり跡を見に行った。択捉がかすかに見える。爺爺岳が青い海の上に浮かんでいる。そのあと、なんとか、馬の背のすべり面を見たいと思って横から断崖を覗き込んでみると、断崖の下の急な崖錐を海岸に向かって降りてゆく人がある。笠原教授であった。これはどうも降りることができそうだ。すべり面を探しながら降りた。がけ下にはなんとグループ全員がいてこっちを見ている。(後で聞いたら、危ないから降りるな、と叫んでいたとのこと)。ゆっくり調べているわけにもいかないようなので、下におりて合流した。帰り道、シーシュキンがイノセラムスを拾った。彼はモスクワ大学で古生物学を学んだひとなのだ。イノセラムス・シコタンエンシスではないか!?彼は鞆に入れた。くれとはいえなかったが(快調だったら言えたかも)、写真だけでも撮らせてもらおうのだったと後悔している。

地すべりの遠景写真を撮りたかったので、午後は島の最高峰斜古丹山(405m)に登って、そのあと再び馬の背に行こうと考えた(すべり面をもう少し探したい)。しかし、結局観測所グループも一緒に山に登ることになり、シーシュキンさんが案内に立った。やはり眺めは最高で、海の蒼さがすばらしい。この山は火山砕屑岩と斑レイ岩からできており、斜古丹側からみると丸いならかな山容をしている。しかし尾根の海側には二重山稜らしい地形がある。グーグルアースで見たとおりだ。一面の草原で、山腹にはロシア風の墓標のような大きな十字架(?)が立っている。誰かが遭難でもしたのだろうかとお話し合った(写真5)。山頂に着くと(どこが正確に山頂かよくわからなかったが)、周りは丸いドーム状の建物やブロック塀のトーチカのようなものの残骸でいっぱい。3連結の軍事用?トラックの残骸もある。風が強くなり、曇ってきて見通しも悪くなってきたが、展望は開けて、島の半分ぐらいは見えたのではなかろうか。わずかな起伏の低い山々が連なる。昔、佐々保雄先生がどこでも歩いて(馬で?)調査したというのがわかるような気がした。火砕岩を見ながらロシアの研究者による色丹島の地質層序区分について教わる。佐々の区分とほとんど一緒だ。

山頂についたというのに、シーシュキンさんはどんどん南に歩いてゆく。とうとう尾根の南端にまで行って、遠くを見ろという。彼が指差すのは島の東端、太平洋に細長く突き出した岬だ。なるほどこれが名高い(?)「世界の果ての岬」か。これを見せるためにここまで来たの

だ。エイタンノット岬、暗い重苦しい空の下に、たしかに世界の端のように太平洋に突き出して見える(写真6)。



写真-5 十字架の近くから斜古丹湾



写真-6 山頂から見た世界の果ての岬(左端)と島の南東部

色丹名水と「北の勝」

色丹水文物理観測所には観測用のトンネルの他、調査用の坑井がある。この井戸からは地下水が湧き出している。なかなかのおいしい水で、「色丹名水だねえ」と話あっていたら、2L ぐらいのペットボトルをかかえたおじさんがやってきた。よくこの水を汲みに来るといふ。この島では有名のようだ。

この井戸は深さ 270m ほどらしい。どこから出ているかわからないが、被圧している。すぐ横には根室層群の泥岩の露頭がある。色丹層だ。かなり硬く厚岸あたりの泥岩とはイメージが違う。ホルンフェルス化しているのかもしれない。色丹層の下位には、枕状溶岩や火砕岩からなる又古丹層が分布している。その境界近くから出ているのだろうか。私のイメージでは根室層群の泥岩ではとても地下水を得るのは無理という印象だったからややビックリした。しかし考えてみると、同じ根室層群からできている根室半島の根室には「北の勝」といううまい酒がある。私も愛飲しているぐらいだから、相当量の水を使っているはずだ。以前から、北の勝の水はどうしているんだろう、と思っていたので、これでなんとなく納得した(会社に確認してないので本当かどうかは保証の限りではない)。

地下水学にはガイベン・ヘルツベルグの法則という法則があるそうだ。スカスカの島では海水準を基準にしてそれより上の地下水位の長さの 40 倍の深さまでは淡水なのだそうだ。この井戸の場所の高さを 20m としてそこまで地下水位があるとすると、相当の範囲で淡水が取れるわけだ。この法則、島に渡って実感した。そして北の勝の水も納得した。

若者の島

前にも書いたが、色丹はベビーブームらしい。今回は昼食と夕食は観測所の下の方の海岸通にある「イルカ」食堂(たぶんそういう意味だろう)でとった(写真7)。ロシアンポップスのDVDがガンガンとかけられ、大きなモニターにダンスを踊るお嬢さんの映像が映っている。お人形さんのような2-3歳の女の子がいっしょに踊ったり、食堂(フロアが広いので夜はディスコか)を切り盛りする若いお母さんにくっついて歩いたりしている。船着場にも小さい子供たちが沢山いた。食堂からの帰りには、楽しそうに笑いながら上ってくる中～高校生らしい一団とすれ違った。若い人の島だ。

色丹では、大学生が夏休みに島の水産工場へアルバイトにやってくるのだそうだ。前は5月だったので、あまり若い人が多いという印象はなかったが、今回はかなりちがう。人も多くなったように感じた。日本も北海道もガンガン子供が必要だ。

そのなかでも最も高齢な一団がわれわれだった。ペリメニやボルシチの食事をすまして観測所に帰った。



写真-7 小降りになったので昼食へ

大嵐の一日

翌13日は大嵐だった。早起きしても外は嵐、夕方にはロサルゴサにもどらなければならない。初めて来た人たちにせめて近くのクリル人墓地ぐらいは案内しようと思ったが、暴風雨である。笠原先生ら観測トンネルでの作業班は雨でも関係ないが、外の仕事の西村さんやわれわれは暗い顔である。浮かない顔でぶらぶらしていたが、西村さんたちは雨の中へ飛び出して行った。昨夜の打合せではメレニコフさんと一緒に斜古丹の岬の灯台付近から観測所まで、ほぼ色丹層(根室層群)の全層準を巡検する予定だったのだったが、小川があふれ、道路や橋が冠水するような大雨でとても無理だった。それでも島を走る車はほとんどがバジェロやランドクルーザーなので、だれも気にしていない様子である。

昼食後、蔭ノ澗にある 1994 年の地震による亀裂だけは見にくくことになった。そのまま帰るのだったら、何のために来たのかと思っていたのでホッとした。壊れたままのサイロ？が転がっている。グーグルアースで見た地すべり地形もあった。(詳しくは 2010 年支部研究発表会の講演要旨をご覧ください)。岬の灯台がどうして明かりがないのかと思っていたが、近づいてみるとすっかり壊れている。嵐の中、海岸におりたら、津波グループが作業していた。門倉さんが戻ってきた。彼には過酷な作業だ。海岸から亀裂を見上げながら写真を取っていると「田近さん、ほんとうに楽しそうですね。」といわれた。観測所で沈黙しているときにはよほど浮かない顔をしていたのだろう。

さよなら色丹－エピローグ

嵐の中、激しい揺れである。夕食後、穴澗でさよならをしてロサルゴサに乗り込んだ(写真 8)。船は国後に向かって動き始めた。笠原先生と北の勝のワンカップを呑み、昨夜の残りの花咲をしゃぶり、海水風呂で汗を流し、「酔い止め」を飲んで眠った。ぐっすりだった。



写真-8 さよなら穴澗湾

意気込んで書き始めたのであるが、最近のことはすぐ忘れるという老人力のため、途中から記憶が断片化して短くなってしまった。ということではじめは様々な問題についても感想を述べながら 3 回ぐらい連載したかったが、これでこの連載をやめることにしたい。最後にこの交流をセットしていただいたロシア側の関係者、日本側の関係者、および訪問団のみなさまに感謝申し上げます。なお、この調査については地すべり学会北海道支部の 2010 年研究発表会で報告し、地質研究所報告(下からダウンロードできます)にも掲載したのでそちらもご参照をお願いしたい。

http://www.gsh.hro.or.jp/publication/digital_publication/d_reports3_index.html#no.81

[現地検討会報告]

平成 22 年度 現地検討会開催の報告

北海道地すべり学会 巡検部

1. はじめに

平成 22 年度の活動として現地検討会を実施した。催行にあたっては、(社)日本地すべり学会北海道支部、日本応用地質学会北海道支部、北海道応用地質研究会との共催、(社)斜面防災対策技術協会北海道支部、北海道地質調査業協会の協賛、北海道地すべり防止工事士会の後援を得て、平成 22 年 8 月 27 日(金)に実施した。

本年度のテーマは「札幌の地下を構成する地質と急崖斜面对策」と題して、急崖斜面对策(豊平峡ダム)と札幌-北広島地質巡検(小金湯、五輪橋、北広島市仁別)の 2 本立てで現地検討会を実施した。

業務の多忙な時期にも関わらず総勢 40 名(一般参加者 35 名、案内者 2 名、幹事 3 名)が参加した現地検討会となりました。

2. 豊平峡ダム

現地の案内は、札幌開発建設部豊平川ダム統合管理事務所豊平峡ダム管理支所の齊藤政憲氏と本間佳之氏、株式会社ドーコンの山真典氏にて行われ、豊平峡ダム、景観に配慮した急崖斜面对策設計・施工技術について現地検討会を実施した。



写真-1 参加者の集合写真
(豊平峡ダム急崖斜面前にて撮影)

はじめに、齊藤政憲氏と本間佳之氏から、豊平峡ダムについての説明がされた。

豊平峡ダムは、札幌市の豊平川上流に建設された多目的ダムであり、洪水調節、生活用水の確保、水力発電に貢献している。また、北海道では珍しい曲線形が美しい

アーチダムであり、ダム周辺の切り立った岩盤や紅葉の絶景、観光放流など毎年約 10 万人の観光客を楽しませている。

その後、山真典氏から豊平峡ダム周辺の急崖斜面調査での留意点や対策工法等の概要が説明された。特に斜面对策工法について、周辺環境と調和した斜面对策工が求められていた。

地質は、新第三紀の定山溪層群である火砕岩を主体としており、急斜面を形成している。検討会の現地では、斜面に崩落の危険がある岩体が多数存在しており、ダム堤体や観光客への被害が懸念されていた。

危険岩体の評価は、岩体の 3 次元レーザ計測、高周波衝撃弾性波法(オーリス)、地震動を考慮した極限平衡解析といった先端的な技術を用いて行われている。

対策工は、不安定岩体背後の立坑坑内から緊結する逆アンカー工法やロックボルトによる固定が行われており、非常に景観に配慮されている。

また、対策工後も斜面の長期的な安定性を確保するためのソフト対策として斜面維持管理マニュアルの作成や亀裂変位計、アンカー荷重計によるリアルタイムの監視が行われている。

現在では、平成 18 年に設置されていたロックネットは撤去され、自然な急崖斜面を見ることができるよう。豊平峡ダムは支笏洞爺国立公園地域内ということで、斜面对策でも景観に配慮した対策工について学ぶことができた。



写真-2 対策斜面と豊平峡ダム

3. 札幌ー北広島地質巡検

現地の案内は、アースサイエンス株式会社の岡孝雄氏により行われた。

札幌の地下を構成する地質の内、新第三紀中新世～鮮新世の砥石層（小金湯）、西野層（五輪橋、北広島市仁別）を見学した。特に、札幌周辺の地質発達史について現地やバス移動の中で説明された。

3-1. 小金湯の砥石層とサッポロカイギュウ

現地は砥石層の泥岩を主体とする地層で、美しい成層構造が見られる河床で行われた。豊平峡ダムの定山溪層群に続き堆積した砥石層の堆積環境、砥石層を貫く貫入岩（小金湯岩体）、サッポロカイギュウ化石が発掘された現場について説明された。



写真-3 砥石層と小金湯岩体のコンタクト

3-2. 五輪橋の西野層

藻岩山の麓に位置する五輪橋では、西野層の火砕岩を観察した。現地ではルートマップやルート柱状図、地質断面図を用いて、小金湯の砥石層の上位に分布する西野層の堆積環境について説明された。



写真-4 西野層の火砕岩露頭

3-3. 北広島市仁別の西野層

北広島市仁別の西野層は、全面露頭において堆積岩や変質安山岩を観察した。岡氏からは札幌の1500万年史について説明がなされた。



写真-5 仁別土取場での現地検討会の様子

現地では西野層の上位に変質安山岩が確認され、参加者は接触面を観察しようと境界を探し、地質発達史についての議論がなされた。



写真-6 西野層と変質安山岩の接触面を探す様子

本年度の現地検討会では、私たちが住む場所がどのような地質発達史を経て現在に至るのかを学ぶことができた。また、土木分野で働く技術者として現場で議論することの重要性を感じさせられた現地検討会であった。

4. おわりに

現地検討会終了後は、サッポロビール園にて意見交換会が行われ、現地と同様に活発な討議が行われ有意義な現地検討会となった。現地では天候に恵まれたこと、夕鉄バスの安全運行、工程の円滑進行にご協力頂いた案内者や参加者のおかげで本年度も無事に全行程を終了することができた。

現地検討会に参加して

明治コンサルタント株式会社 鳥谷部 勇弥

今回の現地検討会では、豊平狭ダム、小金湯、川沿五輪橋、北広島市仁別の四か所を総勢 40 名見学しました。札幌駅北口に集合し、札幌駅を出発しました。

一か所目の豊平狭ダムに着くと、大自然の美しい景観の中に巨大な豊平狭アーチ式ダムが目の前に現れました。アーチダムの近傍には、急崖が発達し、巨大な不安定岩体が多数存在していました。この豊平狭ダムは国立公園内であり、さらに観光地であるということで安全性の確保もさることながら、環境や景観に配慮した対策工の検討が必要であるということで、岩体を背面から緊結する逆アンカー工法が採用されていました。以前のロックネット工法による岩体の落石対策工と比べてみると、その差は一目瞭然でした。逆アンカー工法によって対策が行われた岩体は、人工的な対策が行なわれたことを全く感じさせず、今にも崩落しそうな岩体が迫力を感じさせるようでした。また、メインの岩体以外にも、緊急の対策が必要ではないが、危険性のある岩体が数多存在しており、そういった岩体には挙動を監視する計器が取り付けられており、リアルタイムでの微動監視など非常に高度な技術での対策工法の説明をしていただきました。このような危険除去だけではなく、環境や景観に配慮し、なおかつ効率的な監視などの技術を株式会社ドーコンの山真典氏から非常にわかりやすく丁寧なご説明をして頂き非常に勉強になりました。

二か所目は札幌南区の小金湯で、札幌カイギユウが発掘された場所周辺の見学を行いました。まず、カイギユウの発掘地点を観察しました。河床には黄褐色から白色の、砥山層のシルト岩が確認でき、よく探せば二枚貝などの生物痕化石が確認できるということでした。また、砂岩や泥岩も一部確認することが出来ました。そのほかに小金湯岩体を観察し、説明をうけることで小金湯周辺の地質について理解することが出来たと思います。

三か所目は札幌南区の五輪橋付近に露岩している西野層の礫岩を見学しました。河床には広く西野層の火山礫凝灰岩や凝灰角礫岩の露頭が広がっており、同じ西野層であっても顔つきの違いや、礫の混入量や礫質の変化などが確認できました。まだ知識も浅い私にとって、こういった露頭で実際に観察することで非常に勉強になりました。

今回の見学会最後は北広島市仁別の旧土取場で見られる、西野層群の大露頭を見学しました。大部分が西野層の砂岩であり、一部泥岩を挟んでいました。露頭の砂岩は非常に脆く、ハンマーで簡単に露頭を

掘ることが出来ました。この露頭はとても大きく、堆積構造が非常によく見えていました。初めてこのような巨大な露頭を見ることができ、非常に感動しました。また、小金湯から北広島仁別までの三か所はアースサイエンス株式会社の岡孝雄氏に現場案内とご説明をして頂きましたが、見やすい資料と丁寧なご説明で、理解をすることができました。

今回の現地見学会では、札幌周辺の見学が中心でしたが、普段あまり訪れる機会のない現場を巡ることができ、良い経験となりました。特に何気なく生活している札幌周辺の地質には非常に学ぶことが多く、非常に興味を持ちました。この経験を生かしてこれからの業務に生かしていきたいと考えます。また、現地では、諸先輩方から教えていただく機会も多々あり、普段は学べないような地質に関する知識だけではなく、様々なものを現地で考えることの大切さを学びました。今回で学んだことを生かし、一人前の技術者となれるよう日々努力をしていきたいと思えます。

最後になりましたが、今回の現地検討会開催にあたり、準備および運営をしてくださった幹事の方々に厚くお礼申し上げます。

[総会報告]

平成 22 年度 総会、特別講演、研究発表会の報告

北海道地すべり学会 事業部

1. はじめに

今年度の総会、特別講演、研究発表会は、平成 22 年 4 月 23 日(金)に札幌エルプラザ（札幌市）において、開催されました。参加者は 198 名（会員 127 名、一般参加者 72 名）でした。

2. 総会

総会は、橋本会員の議長により議事の進行が執り行われました。各部・各委員会・事務局から、平成 21 年度の活動報告・決算報告および平成 22 年度活動計画・予算案について議事次第のとおり報告がなされ、いくつかの質疑を経て平成 22 年度総会の議案として承認されました。

また、任期満了に伴って、平成 22 年、23 年度の役員が選出されました。

3. 特別講演および研究発表会

総会に引き続き、社団法人日本地すべり学会北海道支部との共催により開催しました。

特別講演は京都大学防災研究所 松浦純生教授による「温暖化が積雪地帯の土砂災害に与える影響」でした。キーワードは“温暖化、土砂災害、地表面到達水量”であり、北海道で斜面災害を相手にしている私たちにとって非常に興味深い講演でした。

研究発表は 9 件の申し込みがあり、発表が行なわれました。

4. 意見交換会

意見交換会は特別講演および研究発表会終了後に札幌アスペンホテルにて開催しました。参加者は 56 名で、活発な意見交換が行われました。

5. おわりに

今年度の特別講演・研究発表会・意見交換会は多くの方に参加していただき、有意義な一日だったと思います。

会場についてのアンケートでは、“とても良かった”、“毎年同じ会場にして欲しい”というご意見をいただきましたので、今後の運営に反映させたいと考えています。



写真-1 会場全景

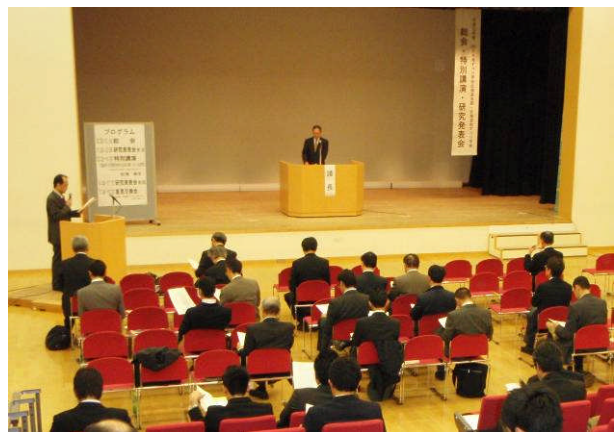


写真-2 総会の様子



写真-3 特別講演の様子

[委員会活動報告]

技術委員会より -平成 21 年度の活動報告と今後の活動計画-

株式会社シン技術コンサル 渡邊 司

1. はじめに

本年度より、技術委員会の委員長として会の企画、運営に当たることとなりました。これまでの各委員長が築かれました実績を踏まえ、委員会の更なる発展に全力を注いでいきますので、今後ともご支援の程、よろしくお願い致します。

さて、技術委員会は、「地すべり調査、解析、対策工の選定、施工など技術にかかわる分野を中心に討議を積み重ね、北海道の地すべり対策技術の向上に貢献する」を目的に平成 4 年に設立されました。

現在は 33 名の委員で構成されておりますが、そのメンバーは地すべり調査・解析、設計、施工、研究に携わるコンサルタント、ゼネコン、研究機関の方々と多岐にわたっております。

委員会は、各分野の委員が日ごろ業務や現場で遭遇した疑問点・問題点、実践した対処法などを紹介し、その技術について本音で議論しあう貴重な場であります。また、地すべりに関する諸基準や新技術などについても収集した情報等を随時発信しており、地すべり技術に関する情報収集の場となっております。

会員の皆様におかれましては、若手技術者の勉強の場として、また地すべりに従事する技術者の情報共有の場として、今後とも幅広く活用していただければ幸いです。

2. 平成 21 年度の活動報告

平成 21 年度は、委員会を計 3 回 (H20. 7、H21. 1) 開催し、地すべりに関する調査技術・対策工法等に関する話題提供と、平成 22 年度以降の活動計画について議論しました。

2.1 第 1 回技術委員会

第 1 回委員会は、平成 21 年 6 月 5 日 (金) に松崎南 1 条ビルディング 2F 会議室において開催しました。参加者は 20 名でした。

議題は、以下のとおりです。

(1) 話題提供

当委員会設立当時から委員長として活躍された橋本氏が、3 年間の山形県への転勤を経て北海道勤務となり、山形での地すべり業務事例についてご紹介頂きました。

- ・『大舟木地すべりについて』

基礎地盤コンサルタンツ(株)北海道支社 橋本 勝 氏

(2) 今後の計画について

委員会の開催は例年通り、年 3 回 (6 月、11 月、2 月) を目標に計画することとしました。また、活動計画は基本的にはこれまで同様、地すべりに関する調査技術・対策工法等に関する話題提供を行うとともに、以下の 3 つのテーマについて、調査・研究を行い、成果を報告することを確認し、その方向性について議論を行いました。

- ①地すべり調査・設計・対策技術に関するアンケート
- ②地すべり技術に関する Q & A
- ③地すべり粘土に関する研究

今後の活動については、以下の各作業を推進していくこととしました。

- ・アンケートの地すべりデータ追加
- ・Q & A の質問事項収集 (技術講習会での記入用紙配布、ホームページの活用)
- ・すべり面粘土と地すべり移動体、および基岩の地質学的・粘土鉱物学的データの集積

2.2 第 2 回技術委員会

第 2 回委員会は、平成 21 年 10 月 2 日 (金) に松崎南 1 条ビルディング 2F 会議室において開催しました。参加者は 16 名でした。

議題は、以下のとおりです。

(1) 話題提供

急傾斜地における土留柵工施工に伴う仮設足場の事例紹介、地すべりと水質、風化に関する紹介、および生田原南地すべりを例とした地すべり粘土に関する研究成果など、以下に示す 3 編の話題提供がありました。

- ・ TK 相取工法と急傾斜地土留柵工用仮設足場のすべり破壊防止方法

㈱伊丸特殊工事 野田 修 氏

- ・ 地すべり粘土と水質および風化との関係

日本公共企画㈱ 松木 義則 氏

- ・ 北海道生田原南地すべり防止区域における岩屑・土砂地すべりのすべり面 (仮題)

北見工業大学 前田 寛之 教授

(2) 今後の活動計画について

各テーマの活動計画について、具体案を議論しました。Q & A 質問用紙の普及について、北海道地すべり学会HPにてダウンロード可能とする対応が施されました(報告)。ただし、質問件数はまだ数件であるため、各委員の所属会社(内部)を含め、再度、収集に協力いただくよう打診しました。

2.3 第3回技術委員会

第3回委員会は、平成22年4月2日(金)に松崎南1条ビルディング 2F 会議室において開催しました。参加者は21名でした。

議題は、以下のとおりです。

(1) 話題提供

寒冷地で問題となる凍上被害についての研究成果、および数値地図を用いた地形解析に関する事例について、以下に示す2編の話題提供がありました。

- ・『斜面の凍上被害と対策のガイドライン』
北海道三祐株式会社 佐々木 裕一 氏
- ・『数値地図でわかる地形の話』
(株)シン技術コンサル 渡邊 司 氏

(2) 今後の活動計画について

各テーマ毎に以下の議論がなされました。

①地すべり調査・設計・対策技術に関するアンケート

- ・データの追加・整理作業に関する段取り、収集作業を推進する。
- ・データの追加は、道農政部を中心に行い8月中旬を目途に締め切る。その後はアンケートの集計ならびに解析に移行する。

②地すべり技術に関するQ & A

- ・前回の議論対象であったQ & A 質問用紙の普及について、北海道地すべり学会HPにてダウンロード可能とする対応を施す方針とした。
- ・質問件数はまだ数件であるため、各委員の所属会社(内部)を含め、再度、収集に協力いただくよう打診した。
- ・平成18年に試験的に実施したQ & A 資料と今回収集されている質問内容を公開できるよう整理し紹介することで、質問数の増加を見込む。

③地すべり粘土に関する研究

- ・研究項目や具体的な活動内容について議論した。
- ・上記Q & Aの内容から、目標としている執筆項目で利用可能なものを抽出し、双方の併用作業にて原稿

を整理していく。

3. 今後の活動計画

平成22年度は、例年通り年3回の委員会開催を計画しています(8月, 11月, 2月)。

また、平成21年度に引き続き、地すべりに関する調査技術・設計・対策技術について話題提供を行うとともに、長期的な活動項目として下記の3つのテーマについて調査・研究し、活動状況を随時ホームページ上に公開する予定です。

なお、いずれのテーマも、平成23年度までの3ヶ年を一つの区切りとして活動を行う予定です。

① 地すべり調査・設計・対策技術に関するアンケート

データの追加作業(主に北海道農政部の地すべり)を行い、アンケート結果の集計、分析作業を推進します。

② 地すべり技術に関するQ & A

質問内容については、各委員の所属会社(内部)を含め、再度、収集すると共に、収集内容を委員会で議論する計画としております。

また、平成18年に試験的に実施したQ & A 資料と今回収集される質問内容を公開できるように整理し、HP等で紹介する予定です。

※ 会員の皆様へ

技術委員会では、地すべりに関する実務で遭遇した疑問・難問を収集し、それら一つ一つを分析・究明して解決策を導く目的で、「地すべり技術に関するQ & A」と題した活動を行っております。つきましては、会員の皆様から、広く質問事項を収集したく、ご協力お願いいたします。

記入用紙は、北海道地すべり学会ホームページ(技術委員会からのお知らせ欄)にアップロードしておりますので、質問事項がある方は記入用紙にその内容を記載の上(要綱を参照)、指定の連絡先へ投稿してください。

③ 地すべり粘土に関する研究

昨年に引き続き、以下の活動を計画しています。

- ・すべり面粘土と地すべり移動体および基岩の地質学および粘土鉱物学的データを集積する
- ・それらの土質力学的および岩石力学的データについても文献調査、各種試験などを行って蓄積する
- ・地すべり学における実務に役立つ土質力学や岩石力学の確立を目指す

本年は、実務に役立つすべり面粘土の研究に関する成果の作成を推進するとともに、粘土鉱物に関する基礎的な部分についての講座を企画し、近く話題提供を行う予定です。

企画委員会より

明治コンサルタント株式会社 納谷 宏

平成 21 年度活動報告

企画委員会では、平成 21 年度に以下の活動を行いました。

(1) 企画委員会の開催

企画委員会を 2009 年 11 月 24 日に開催した。平成 21 年度の活動の具体的内容とスケジュール、役割分担などについて議論した。

(2) 各種研修会出前授業の実施

(2)-1 北海道農政部「平成 21 年度 全道地すべり事業 担当者会議 地すべり研修会」講師

◆対象：本庁および各支庁の地すべり担当者 38 名

◆日時：2009 年 12 月 1 日（火）13：30～16：00（合計 2 時間 30 分）

◆場所：かでの 2・7

◆講習内容：

「地すべりの基本的事項の講習（パワーポイント説明と模型の実習）」

「北海道の地すべり事例の紹介」

協力：北海道地質調査業協会 若松技術アドバイザー

(2)-2 北海道岩見沢農業高等学校「山地防災教室」開催

◆対象：同校森林科学科の 1 年生および 2 年生各約 40 名を対象に別々に実施

◆日時：2010 年 2 月 18 日（木）

10：40～12：10（森林科学科 1 年生徒）（1 時間 30 分）

13：15～14：45（森林科学科 2 年生徒）（1 時間 30 分）

◆場所：北海道岩見沢農業高等学校

◆講習内容：

「治山」「山地防災」「森林の役割」と「地すべり防災」をからめた基礎的事項の授業および地すべり模型、地表伸縮計模型、パイプ歪計、地下水位計模型を使った実習

(2)-3 北海道農政部「平成 21 年度 農業土木技術職員技術向上研修」講師

◆対象：本庁および各支庁の農業土木技術職員 16 名

◆日時：2010 年 2 月 24 日（火）地すべり学会担当 13：00～15：00（合計 2 時間）

◆場所：北海道自治労会館

◆講習内容：

「微地形および地すべり地形の航空写真判読および地すべり模型の講習（パワーポイント説明と模型の実習）」

平成 22 年度活動計画

企画委員会では、平成 22 年度の活動として以下の計画をしております。

(1) 企画委員会の開催

企画委員会を開催し、活動内容と進捗状況、問題点などについて検討する予定である。

(2) 一般市民を対象とした地すべり防災教室の開催

平成 21 年度同様に、市民や子供たち、学生、行政機関を対象に、地すべり防災授業と地すべり模型、地すべり観測機器模型の出張展示実演を行う予定である。

具体的には、2010 年 6 月 27 日（日）～30 日（水）の 4 日間 日高振興局主催「平成 22 年度日高振興局山地災害防止キャンペーン（治山事業写真パネル展）」（場所：浦河郡浦河町大通 3 丁目 浦河ショッピングセンター M i O 1 階特別催事場）に協力し、地すべり模型の展示実演を行った。

また、2010 年 10 月 2 日（土）に北海道農政部主催「農業・農村体験 in 赤レンガ」（場所：道庁赤レンガ）に出展予定であるほか、昨年度同様に農業高校の生徒を対象とした「山地防災教室」を開催する予定である。

(3) 地すべり模型教材の改良等の実施

地すべり防災授業に使用する地すべり模型、各地すべり観測機器模型の改良を行う他、地すべり運動の映像資料の製作を進める予定である。

(4) 企画委員会メンバー募集

企画委員会では、市民や将来の地域文化を担う子供たちが科学的知識に基づいて自分の判断で的確な防災・減災活動を行うことや、地域の自然環境に興味を持ってもらえるよう、市民を対象としたイベントや勉強会、各種学校の生徒、行政機関や企業職員を対象とした講習会、出前授業などの実践を行っております。

現在、この活動をするにあたり、メンバーが不足していることから、広く参加していただける方を募集しております。

参加希望の方は、企画委員会（担当：納谷 naya-h@meicon.co.jp）までご連絡下さい。

研究委員会の H21 年度活動報告と今後の活動計画

北海道立総合研究機構 地質研究所 石丸 聡

1. 最近の研究委員会の活動

研究委員会では、北海道を中心とした地すべり事例を収集し、その発生・運動・分布等の特徴について検討してきました。その成果は、これまでも書籍や DVD などに公表してきたところです。現在は「地すべりの活動性評価・ハザードマップ作成」についての調査研究を中心に、30名のメンバーで活動を行なっています。

ここ数年は委員会を年 2～3 回開催し、テーマ調査研究や最近発生した地すべり・斜面災害についての情報交換を行っております。テーマ調査研究の地すべりの活動性評価・ハザードマップ作成については、道内外からこれに関連した話題提供をいただき情報収集を行うほか、北海道重点研究「土砂災害軽減のための地すべり活動度評価手法の開発」と連携した調査研究を進めています。

委員会の開催案内、活動報告、作業状況については学会 HP を通じて公開しています。また、学会メーリングリストなどを通じて情報更新のお知らせを流しますので、是非ご覧ください。委員会に所属していない方でも聴講可能ですので、開催案内を見て興味を持たれた方はどうぞご参加ください。

2. 平成 21 年度の活動報告

平成 21 年度は以下の通り 2 回の委員会を開催しました。

◎平成 21 年度第 1 回（通算 47 回）委員会

日時：平成 21 年 8 月 3 日（月曜日）

15 時 30 分～17 時 30 分

会場：JST イノベーションプラザ セミナー室

参加者：17 名

話題提供：

「AHP 法を学ぶ」

高橋 清 准教授（北見工業大学）

近年、地すべり評価や災害時の避難行動についての解析に意思決定プロセスの AHP 法が用いられています。委員会ではこの手法を用いた地すべり活動度評価に関連する作業に取り組むことから、AHP 法に関する研究を数多く扱われてきた高橋先生に、素人にもわかるように AHP 法のお話をいただきました。

ペルー日本人公邸人質事件でのペルー政府の選択手段や消費者の自家用車の購入の意思決定などを例に AHP 法の仕組みをわかりやすく説明していただき、行列を用いた最大固有値を解く基本的手法や計算の簡便な幾何平均法について解説していただきました。さらに、AHP 法を用いる際に注意すべき点や、データの一貫性をチェックする方法についても教えていただきました。

討議事項：テーマ調査研究の今後の作業について

地震地すべり災害事例の情報提供について

◎平成 21 年度第 2 回（通算 48 回）委員会

日時：平成 22 年 2 月 2 日（火曜日）

15 時 30 分～17 時 30 分

会場：JST イノベーションプラザ セミナー室

参加者：18 名

話題提供：

「地震と地すべり」

阿部 真郎 氏（奥山ボーリング株式会社）

昨年（平成 21 年）から（社）日本地すべり学会で「地震地すべりプロジェクト」が重点的な課題として取り組まれていることから、その中の主要な柱の一つである地震地すべりの事例解析を進められている阿部さんに、その概要についてお話いただきました。

日本全国および世界で発生した地震地すべりの事例を整理し、地質ごとに変動発生地点の震央距離と、そこで生じた変動様式についてまとめられた成果を紹介していただきました。また、荒砥沢地すべりの変動プロセスの検討結果や、動的弾塑性有限要素法解析による地形ごとの地震応答について解説していただきました。

討議事項：地すべり斜面の活動性について（伊藤・石丸）

テーマ調査研究の今後の活動について

3. 今後の活動計画

これまで作業を進めてきた滝川地区の地すべり分布図のとりまとめを行うとともに、道内各地で地すべり活動度の判定を行うことを検討しています。また、今後、北海道特有の地すべりに焦点を当て、これに関する取り組みを行うことも考えております。それ以外にも、これまで同様、豪雨や地震等による突発災害などが生じた際には、緊急的な被災報告などを行う予定です。

現在、地すべり災害データファイルの充実に向けて作業を進めています。地すべり'99 および 30 周年記念 CD に掲載されている地すべり災害について、著者の皆様に原稿（図表・写真を含め A4、2 ページ）の作成・投稿をお願いしております。関係者の皆様、よろしくお願いたします。

[事務局より]

学会の動向と記録

第1回 幹事会

日時：平成22年7月13日（火曜日） 14:00～16:00

場所：JSTイノベーションプラザ

特に新第三紀中新世～鮮新世の定山溪層群、砥山層、西野層を観察)、開催日は8月27日(金)を予定し、日帰りの工程で募集人数は35名を予定する。

1. 平成22年度 事業計画

○総会および研究発表会（事業部）

総会および研究発表会について以下の報告があった。

総会を平成22年4月23日(金)に札幌エルプラザ(札幌市)において開催し、同会場で(社)日本地すべり学会北海道支部との共催により、参加者198名(会員140名、一般参加者58名)を得て研究発表会を行った。

特別講演は京都大学防災研究所の松浦純生教授による「温暖化が積雪地帯の土砂災害に与える影響」であった。研究発表は学生を含む9件の発表が行われ、盛況であった。

意見交換会を特別講演および研究発表会終了後に札幌アスペンホテルにて開催した。

○広報部の活動（広報部）

広報部から以下の活動を行う旨の報告があった。

- (1)北海道地すべり学会のホームページの運営・管理を行う。
- (2)メーリングリストを運営し、学会行事や事務伝達を行う。4月段階のメーリングリストへの会員の参加状況は、官庁・学生：36/51(70.6%)、民間：205/254(80.9%)、全体：241/305(79.0%)((社)日本地すべり学会北海道支部会員も含む)である。
- (3)北海道地すべり学会ニュース「地すべり北海道28」を発行する。
- (4)「北海道の地すべり研究30年」の販売促進活動を引き続き行う。
- (5)平成23年4月に開催される研究発表会の予稿集を編集発行する。

○巡検部の活動（巡検部）

巡検部からは以下の活動を行う旨の報告があった。

見地見学会は(社)日本地すべり学会北海道支部、日本応用地質学会北海道支部、北海道応用地質研究会との共催で行う。また、(社)斜面防災対策技術協会北海道支部、北海道地質調査業協会の協賛、北海道地すべり防止工事士会の後援を頂き開催する予定である。

開催地は「①豊平峡ダム(アーチダム近傍の急崖斜面対策、特に景観に配慮した対策設計・施工技術を見学)、②札幌～北広島地質巡検(札幌の地下を構成する地質、

○技術普及部の活動（技術普及部）

技術普及部からは以下の活動方針であることが報告された。

ここ数年は、若手技術者の実務に役立ち、かつ教科書等に書かれることのないような内容をテーマにするという方針のもとに、依頼する講師の方の得意な分野も考慮し、地すべり調査の総合事例やコアの観察方法、特殊な調査方法などを紹介している。今年度も同様な方針のもと9～10月に講習会開催を予定している。

○技術委員会の活動（技術委員会）

技術委員会からは年3回の委員会開催を計画(8月、11月、2月)し、以下の活動方針であるとの報告があった。平成21年度に引き続き、地すべりに関する調査技術・設計・対策技術に関する話題提供を行う。

また、長期的な活動項目として以下のテーマについて調査・研究し、活動状況をホームページ上に公開する。

- (1)地すべり調査・設計・対策技術に関するアンケートの実施
- (2)地すべり技術に関するQ&Aの開催
- (3)地すべり粘土に関する研究

昨年に引き続き、各テーマにかかわるデータや題材の集積作業を行うとともに、収集資料の分析、取りまとめを行っていく。

- ・アンケートの地すべりデータ追加と再分析
- ・Q&Aの質問事項収集(ホームページの活用)および整理
- ・すべり面粘土と地すべり移動体および基岩の地質学および粘土鉱物学的データの集積・研究

○研究委員会の活動（研究委員会）

平成22年度は2～3回の委員会を予定しており、内容はテーマ調査研究に関連した話題提供・作業進捗状況の確認、ホームページの充実などを計画している旨の報告があった。

- (1)委員会等の開催

平成22年度は2～3回の委員会を予定している。内容はテーマ調査研究に関連した話題提供・作業の確認、および地すべり災害が生じた際は緊急報告を行う予定である。

(2) テーマ調査研究

地質研究所の北海道重点研究「土砂災害軽減のための地すべり活動度評価手法の開発」と連携した調査研究の推進を予定している。

(3) 活動状況の公開

委員会の開催案内・報告、作業状況などを学会ホームページで公開する。

(4) ホームページ充実への対応

地すべり災害データファイルの充実に向けての作業を進める。地すべり'99および30周年記念CDに掲載されている地すべり災害についての原稿作成（図表・写真を含めA4, 2ページ）・投稿をお願いしたい。

(3) 地すべり模型教材の改良等の実施

地すべり防災授業に使用する地すべり模型、各地すべり観測機器模型の改良を行う他、地すべり運動の映像資料の製作を進める予定である。

2. 会員状況（事務局）

平成22年6月30日現在の会員は、官公庁・大学関係者が38名、民間関係者が238名の合計276名で、賛助会員は民間31社である。

平成22年度に新たに入会した方が14名、退会した方が13名となっている。規定第4条7の会費未納による除籍対象者（H20, 21, 22年度分 会費未納者）は、民間6名である。

また、この中で（社）日本地すべり学会の会員でもある方は、官公庁・大学関係で11名、民間関係者で55名である。

まだ、入金されていない方は、早めにご入金していただくようお願い申し上げます。

○企画委員会活動（企画委員会）

企画委員会から以下の活動計画と活動内容が報告された。

(1) 企画委員会の開催

企画委員会を開催し、活動内容と進捗状況、問題点などについて検討する予定である。

(2) 一般市民を対象とした地すべり防災教室の開催

平成21年度同様に、市民や子供たち、学生、行政機関を対象に、地すべり防災授業と地すべり模型、地すべり観測機器模型の出張展示実演を行う予定である。具体的には、平成22年6月27日（日）～30日（水）の4日間に日高振興局主催「平成22年度日高振興局山地災害防止キャンペーン」に協力し、地すべり模型の展示実演を行った。

また、平成22年10月2日（土）に北海道農政部主催「農業・農村体験in赤レンガ」（場所：道庁赤レンガ）に出展予定である。

[お知らせ]

（社）日本地すべり学会北海道支部、北海道地すべり学会平成23年度総会のご案内（事業部）

平成23年度総会は、平成23年4月25日（月曜日）、札幌エルプラザ（札幌市北区北8条西3丁目）で開催予定です。詳細が決まりしだい、メーリングリスト等でご連絡を差し上げます。

[賛助会員名簿]

北海道地すべり学会賛助会員名簿

会員名	郵便番号	住所	電話番号
(株)イーエス総合研究所	007-0895	札幌市東区中沼西5条1丁目8番1号	011-791-1651
岩崎(株)	060-0034	札幌市中央区北4条東2丁目1番地	011-252-2000
上山試錐工業(株)	060-0032	札幌市中央区北2条東13丁目1-7	011-241-6516
応用地質(株)札幌支社	003-0023	札幌市白石区南郷通1丁目北9-20	011-863-6711
(株)開発調査研究所	062-0054	札幌市豊平区月寒東4条10丁目7-1	011-852-5053
川崎地質(株)北海道支店	060-0031	札幌市中央区北1条東2丁目 札幌泉第2ビル	011-232-1344
基礎地盤コンサルタンツ(株)北海道支社	003-0807	札幌市白石区菊水7条2丁目7-1 SEビル	011-822-4171
(株)構研エンジニアリング	065-8510	札幌市東区北18条東17丁目1-1	011-780-2811
国土防災技術北海道(株)	060-0033	札幌市中央区北3条東3丁目 KNビル	011-232-3521
サンコーコンサルタント(株)札幌支店	003-0807	札幌市白石区菊水3条2-4-1 ネクステムビル	011-837-5580
(株)シーイーサービス	062-0032	札幌市豊平区西岡2条8丁目5-27	011-855-4440
(株)シビテック	003-0002	札幌市白石区東札幌2条5丁目8-1	011-816-3001
(株)シン技術コンサル	003-0021	札幌市白石区栄通2丁目8-30	011-859-2600
(株)地圏総合コンサルタント札幌支店 (旧社名:住鉦コンサルタント(株))	064-0006	札幌市中央区北6条西22丁目2-3チュリス札幌	011-615-1520
(株)測機社	064-0914	札幌市中央区南14条西11丁目3-3	011-561-5203
ダイシン設計(株)	060-0005	札幌市中央区北5条西6丁目1-23 道通ビル	011-222-2325
大地コンサルタント(株)	070-0054	旭川市4条西2丁目1番12号	0166-22-7341
(株)ダイヤコンサルタント 北海道支社	001-0010	札幌市北区北10条西2丁目13番地2	011-729-2701
中央開発(株)札幌支店	003-0002	札幌市白石区東札幌2条5丁目76-3	011-842-4155
(株)ドーコン	004-8585	札幌市厚別区厚別中央1条5丁目4-1	011-801-1500
トキワ地研(株)	065-0028	札幌市東区北28条東2丁目779	011-751-4841
日特建設(株)札幌支店	004-0041	札幌市厚別区大谷地東4丁目2-20第2西村ビル	011-801-3611
日本基礎技術(株)札幌支店	067-0051	江別市工業町8番地9	011-391-3117
日本工営(株)札幌支店	060-0005	札幌市中央区北5条西6丁目 札幌センタービル	011-205-5531
パブリックコンサルタント(株)	060-0005	札幌市中央区北5条西6丁目 第2道通ビル	011-222-3338
防災地質工業(株)	001-0907	札幌市北区新琴似7条15丁目6-22	011-763-2939
北海道三祐(株)	002-0856	札幌市北区屯田6条8丁目9-12	011-773-5121
北海道土質コンサルタント(株)	062-0931	札幌市豊平区岸岸1条2丁目5-16	011-841-1466
明治コンサルタント(株)	064-0807	札幌市中央区南7条西1丁目13 第3弘安ビル	011-562-3066
(株)メジャメント	064-0912	札幌市中央区南12条西12丁目1-13	011-551-6623
ライト工業(株)札幌支店	060-0006	札幌市中央区北6条西18丁目1-7	011-631-6486
和光技研(株)	064-8507	札幌市中央区宮の森3条1丁目3-15	011-611-0206

※この名簿には、賛助会員のうち公開を希望した会員だけを表示してあります。表示は五十音順。

[学会役員幹事運営委員名簿]

平成22年度 北海道地すべり学会 幹事 名簿

役職	氏名	所 属	所属組織での役職
会長	田近 淳	北海道立総合研究機構 地質研究所	地域地質部長
副会長	伊藤 陽司	北見工業大学 工学部土木開発工学科	准教授
副会長	丸谷 知己	北海道大学大学院 農学研究科	教授
監査委員	若山 茂	(有) テレリサーチ	代表取締役
監査委員	雨宮 和夫	防災地質工業 (株)	代表取締役

【幹事会】

幹事長	中村 研	(有) 地盤工房	代表取締役
副幹事長	伊東 佳彦	独立行政法人土木研究所 寒地土木研究所	防災地質チーム 首席研究員
副幹事長	小沼 忠久	国土防災技術北海道 (株)	代表取締役
顧問	前田 寛之	北見工業大学工学部 土木開発工学科	教授
幹事	米田 哲朗	北海道大学大学院 工学研究科	教授
幹事 (事務局長)	中田 勝仁	日本工営 (株) 札幌支店	技術第二部 防災グループ
幹事 (事務局次長、研究委員会委員長)	石丸 聡	北海道立総合研究機構 地質研究所	地域地質部
幹事 (事務局次長、技術委員会委員長)	渡邊 司	(株) シン技術コンサル	環境地質部
幹事 (事務局次長)	清水 順二	明治コンサルタント (株)	技術部防災課 グループリーダー
幹事 (事業部長)	戸田 英明	(株) ドーコン	地質部 主任技師
幹事 (事業部副部長)	藤原 知行	サンコーコンサルタント (株) 札幌支店	地質課
幹事 (事業部副部長)	川上 源太郎	北海道立総合研究機構 地質研究所	地域地質部 研究職員
幹事 (広報部長)	磯貝 晃一	(株) 開発調査研究所	地質部
幹事 (広報部副部長)	安田 匡	(株) 田宮設計事務所	技術部
幹事 (広報部副部長)	青木 淳	(株) 構研エンジニアリング	地質部
幹事 (巡検部長)	加藤 且久	東日工業 (株)	地質調査部
幹事 (巡検部副部長)	佐々木 隆	上山試錐工業 (株)	土質試験研究所
幹事 (巡検部副部長)	澁谷 奨	(株) 地圏総合コンサルタント札幌支店 (旧社名：住鉦コンサルタント)	技術部 地質課
幹事 (技術普及部長)	伊吹 敦	(有) 北海化成工業所	営業部長
幹事 (技術普及部副部長)	新田 雅樹	応用地質 (株) 札幌支社	技術部 グループマネージャー
幹事 (技術委員会副委員長)	渡辺 一樹	(株) ダイヤコンサルタント 北海道支社	地盤技術部
幹事 (技術委員会副委員長)	柴田 純	(株) シビテック	防災地質部
幹事 (企画委員会委員長)	納谷 宏	明治コンサルタント (株)	技術部防災課課長

オブザーバー	甲斐 明	北海道開発局建設部道路建設課	道路技術係長
オブザーバー	荒川 隆嗣	北海道開発局農業水産部農業計画課	開発専門官
オブザーバー	喜多 博志	北海道建設部土木局砂防災害課	砂防グループ主査
オブザーバー	清水 将夫	北海道農政部農村振興局農村整備課	防災災害グループ主査
オブザーバー	米屋 鶏太	北海道水産林務部林務局治山課	治山事業グループ主査

平成22年度 (社)日本地すべり学会北海道支部 運営委員名簿

役職	氏名	所 属	所属組織での役職
支部長	田近 淳	北海道立総合研究機構 地質研究所	地域地質部長
副支部長	米田 哲朗	北海道大学大学院 工学研究科	教授
副支部長	丸谷 知己	北海道大学大学院 農学研究科	教授
副支部長	伊東 佳彦	独立行政法人土木研究所 寒地土木研究所	防災地質チーム 上席研究員
副支部長	納谷 宏	明治コンサルタント (株)	技術部防災課課長
監査委員	若山 茂	(有) テレリサーチ	代表取締役
監査委員	雨宮 和夫	防災地質工業 (株)	代表取締役

【運営委員会】

運営委員	中村 研	(有) 地盤工房	代表取締役
運営委員	小沼 忠久	国土防災技術北海道 (株)	代表取締役
運営委員	前田 寛之	北見工業大学工学部 土木開発工学科	教授
運営委員	伊藤 陽司	北見工業大学 工学部土木開発工学科	准教授
運営委員	戸田 英明	(株) ドーコン	地質部主任技師
運営委員	藤原 知行	サンコーコンサルタント (株) 札幌支店	地質課
運営委員	川上 源太郎	北海道立総合研究機構 地質研究所	地域地質部 研究職員
運営委員	磯貝 晃一	(株) 開発調査研究所	地質部
運営委員	安田 匡	(株) 田宮設計事務所	技術部
運営委員	青木 淳	(株) 構研エンジニアリング	地質部
運営委員	加藤 且久	東日工業 (株)	地質調査部
運営委員	佐々木 隆	上山試錐工業 (株)	土質試験研究所
運営委員	澁谷 奨	(株) 地圏総合コンサルタント札幌支店 (旧社名: 住鉄コンサルタント)	技術部 地質課
運営委員	伊吹 敦	(有) 北海化成工業所	営業部長
運営委員	新田 雅樹	応用地質 (株) 札幌支社	技術部 グループマネージャー
運営委員	渡辺 一樹	(株) ダイヤコンサルタント 北海道支社	地盤技術部
運営委員	柴田 純	(株) シビテック	防災地質部
運営委員 (事務局長)	中田 勝仁	日本工営 (株) 札幌支店	技術第二部 防災グループ
運営委員 (事務局次長)	石丸 聡	北海道立総合研究機構 地質研究所	地域地質部
運営委員 (事務局次長)	渡邊 司	(株) シン技術コンサル	環境地質部
運営委員 (事務局次長)	清水 順二	明治コンサルタント (株)	技術部防災課 グループリーダー

オブザーバー	甲斐 明	北海道開発局建設部道路建設課	道路技術係長
オブザーバー	荒川 隆嗣	北海道開発局農業水産部農業計画課	開発専門官
オブザーバー	喜多 博志	北海道建設部土木局砂防災害課	砂防グループ主査
オブザーバー	清水 将夫	北海道農政部農村振興局農村整備課	防災災害グループ主査
オブザーバー	米屋 鶏太	北海道水産林務部林務局治山課	治山事業グループ主査

[編集後記]

2010年の北海道の夏は、記録的な猛暑、豪雨に遭遇した箇所も多く、大変な年になってしまいました。異常気象に伴う災害に関係されている方々は、まだまだご苦労が続くこととお察しいたします。毎年のように続く異常気象ですが、もはや「異常」という状況が当たり前になり、「正常」な北海道らしい気候をイメージするのが難しくなってきました。

慌ただしいなかで、新装「地すべり北海道」(北海道地すべり学会ニュース)も復刊後第二号の発行にこぎつけました。お忙しい中、原稿執筆に協力していただいた方々に深く感謝申し上げます。

北海道が経験したことのない異常気象が続く中で、今後学会が発信すべき情報の重要性はどんどん増していくと思われれます。皆様からも原稿をお寄せいただき、さらに内容が充実するように努めたいと思います。

ご意見、ご感想など御座いましたら、下記問い合わせ先までよろしくお願い致します。

原稿募集

皆様からの原稿を、常時募集致します。内容は、広く地すべりに関連する興味深い話題であればご自由ですので、下記原稿送付先までお送りください。

問い合わせ、原稿送付先

磯貝 晃一 (株)開発調査研究所 技術第二部
〒062-0054 札幌市豊平区月寒東4条10丁目
Tel:011-852-6835 Fax:011-855-1298
E-mail: isogai.152@kaichoken.co.jp

安田 匡 (株)田宮設計事務所
〒064-0823 札幌市中央区北3条西24丁目
Tel:011-643-8666 Fax:011-643-8940
E-mail: yasuda@tamiya-sekkei.co.jp

青木 淳 (株)構研エンジニアリング 地質部
〒065-8510 札幌市東区北18条東17丁目
Tel:011-780-2811 Fax:011-780-2832
E-mail: a.aoki@koken-e.co.jp

地すべり北海道 28 ～北海道地すべり学会ニュース～

発行日 2010年10月1日
発行者 北海道地すべり学会
発行責任者 北海道地すべり学会会長 田近 淳
広報部 磯貝 晃一、安田 匡、青木 淳